北條早雲

尾崎士郎

（乱丁・落丁の場合はお取替え致します）

昭和三十年五月二十日発行

定価二百七十円
地方定価二百七十五円

著作者　尾崎士郎
発行者　大野泰子
整版者　磯貝兌雄

東京都文京区大塚坂下町五七
発行所　東方社
電話大塚一八七三番
振替東京五七七七四番

（印刷・邦文堂印刷所）

1955　Tohosya　Printed in Japan

新作
時代小説

北條早雲

尾崎士郎

新作時代小説 北條早雲

北條早雲 5

ひよつと齋一代記 75

哀しき貞操 101

水野十郎左 127

ハ　ト　坂　16
七卿西落抄　197
長崎軍艦ポッペン号　219
雪の朝の記録　257

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

裝
幀

江
崎
孝
坪

北條早雲

一

伊勢新九郎長氏。長氏という名は、彼が後年になつて勝手につけたものである。

まして北条なぞという姓は、何の根拠もなければ出典もなく、唯、伊勢に生れたから伊勢新九郎、これに威勢を添えるために北条を名乗つて、語呂のいいように長氏とつけた。

生れながらの野人であり、父を知らねば母も知らず、鈴鹿山麓の洞穴に住んで、自然のままに成長した。今日の言葉でいえば、正しく打つてつけの浮浪児で、特に身につけた教養というべきものはなく、武芸にいたつては山野を駈け廻つているあいだに、見よう見真似で、ひとりでに覚えたというだけのことである。

だからといつて彼が北条を名乗り、伊勢平氏と呼んだのをもつて一世を偽るものと解釈するのは適当ではない。頼朝にしても義経にしても、彼等がもし時世の混乱に押し流されて、蛭ケ小島や鞍馬山から転転として流離唯ならぬ生活をつづけていたとしたら、すでに物心のついていた頼朝はともかくとして、まだ生れたばかりの義経は、かりに生きていたとしても、どのような姿をもつて現われてきたか知るべきよすがもないのである。

新九郎も源九郎も、彼等の上に作用した運命の微妙な動きをのぞけば、もとより大した相違は

ない。源九郎義経が素姓いやしからぬ男として歴史に伝わつているのも時の偶然であるが、伊勢新九郎の存在が草賊の親方として鈴鹿山麓に蟠居したことは、それにもまして不可思議な偶然である。

「北条五代記」と「今川記」の筆者の説くところによれば、新九郎の祖父は伊勢守と名乗る豪族で、北条時政の旧邸に暮していたという。そんな男がいたかどうかということも不明であるが、新九郎は、伊勢守なにがしの嫡男、備中守貞藤の次男ということになつている。その「五代記」の筆者が、このような空々しいことを平気で書きながら、「伊豆早雲由来之事」という章の冒頭に、「この説おぼつかなし、されば、われわれと江戸にあつて近辺の町人の噂をきよう聞き、あくる日に事を問えば虚言のみ多し、況んや江戸中の事をや」と明言しているくらいであるから、まして百年前の人の噂なぞというものは、ほとんど無責任な放言と思えば、先ずまちがいはない。新九郎長氏についても、これを氏茂と呼ぶ一説もあり、そのいずれが正しいかなぞということは詮索することそれ自体が愚の骨頂である。

とにかく、新九郎は雲のごとく湧きのぼる伝説の中から生れた。誰が何と言おうとも、われは平家の末流、前代北条につながる伊勢の嫡々である。

その彼が、闇屋にもならず、暴力団にもならず、天下の風雲に乗じて立つたのは時代が彼に幸

いしたからである。

何しろ、応仁元年からはじまつて、つづく文明九年まで、前後十一カ年間にわたつて京都を中心に日本全国にひろがつていつた戦乱がいかに庶民の生活を混乱と不安に陥れたかということは想像にあまりあるものがある。

これがために、もつとも甚大な被害をうけたのは京都をはじめ、周辺の土地で、皇居はもちろん公卿の屋敷から、名だたる寺院の大半が焼け落ちた。全市はたちまち焦土と化し、それが十一年もつづいたとすれば、政治もなければ文化もなく、室町幕府は辛うじて形だけを残していたとはいうものの、政令が全国に及ぶ道理もなく、六十余州、どこをさがしても安泰な場所なぞは求めるべくもなかつた。この時代の記録と文献が、ほとんどことごとく歴史の外に没し去つているのもむしろ当然というべきであろう。

なれや知る都は野べの夕雲雀あがるを見ても落つる涙は、——という歌は何びとの作ともわからぬが、その頃の荒れはてた都びとの生活がありありと眼底にうかんでくる。東西両軍合せて三十万。東軍の総帥細川勝元は二十四カ国の兵をあつめて十八万、これに対抗する西軍の山名宗全は二十カ国の兵をすぐつて十二万。

この大軍が、京都をはさんで対峙しながら根気のいい戦争をつづけているのだから、近江、美

濃、伊勢一帯の、京都にちかい土地で満足な生活を保つている人間はほとんど一人もなかつたといつていい。

土着の青年という青年は片つぱしから兵役に駆りたてられて荷物の運搬や雑役に追い廻される。各地の豪族は、昨日細川の幕下になつたと思うと、今日は山名の一隊に攻めたてられ、やつと落ちついたと思うまもなく、次の日は細川に侵略されるというわけで、街道筋の宿場町はことごとく兵営に一変した。哀れなのは女子供たちで、かくれる場所もなければ逃げる道もない。尊卑高下の区別もなく、ひと合戦終つたあとには必ず催される勝ち戦の酒盛りに、若い女は、娘たると人妻たるとを問わず、宴席によびだされて、無理強いに舞いをやつたり、酒の酌をしてまわつた上に、大将株の男から、これと目星をつけられたらもう最後である。

時によると、その酒宴のまつ最中に、敵の逆襲をうける場合もないではない。そのときの混乱は言語に絶するばかりで、裾をみだして逃げ惑う女たちを、まるで兎狩りでもするように、誰彼れの差別もなく、動物的な慾情の鬼と化した雑兵たちが、歯をがくがく鳴らしながら、庭だろうと縁の下だろうと、ところきらわず追い駈ける。

彼等にしても、一夜にして散る蕾の花を惜しむ心がないわけではない。唯、殺伐な時の流れは、人間の良心も正義感も、道義も愛情も、ことごとく、もみくしやにして、ひた押しに、ぐいぐい

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

と押し流してゆくのである。

二

正規の軍隊には、しかし、まだしも多少の規律があり、それに伴う感情の制約があつた。それが、数年経つうちに臨時の傭兵によつて部隊が大半を占められるようになると、戦争の大義名分なぞはどこかへ消え去つて、唯、一日の慾望だけが彼等の心を唆しかける。いたるところに、眼を掩うばかりの地獄図が展開され、山賊あがりの雑兵が、逃げ惑う女たちを片つぱしから生け捕りにして、これを珠数つなぎに麻縄で縛り、通りすがりの男に二束三文に売つていたという話も記録に残つているほどであるから、政令の行き届かぬ往来のはげしい街道では、落ちついて生業に就いていられる筈もない。

良民の大半は、ほとんど着のみ着のままで、扇谷、内山、――の二つにわかれた両上杉の管領下にある東海道方面にのがれ、残つた連中のうちには、戦火の中に女房を失い、娘を奪われた腹癒せに、進んで軍兵を志願して、戦争のどさくさにまぎれ、他人の家へ押入つて乱暴狼藉を働くやつも出てきた。

伊勢新九郎が、彼と同じ浮浪児出身の精鋭をあつめて、鈴鹿山麓を根拠地にえらび、野武士の

大将として羽振りを利かすようになつたのは、十年間戦つた細川も山名もへとへとに疲れ、三十万の大軍も今や、四分五裂、都は野べの夕ひばりどころではない。街道筋の宿駅は、半ば焼け落ちて、戦場のあとにとり残された屍骸をとりかたづけるものもなく、惨澹たる殺気が、近江、伊勢、美濃につながる中山道の隅々にまで沁みわたつている頃である。

文明五年、――その年の三月に西軍の総帥、山名宗全が死んだ。それから一ト月と経たぬうちに細川勝元が病没して、戦争の中心人物はこの世から消え去つてしまつたのに、しかし、つぎつぎとあらわれてくる新興勢力は互いに領地の争奪に狂奔して、混乱はいよいよ深刻な様相を呈してきた。

伊勢新九郎は細川方でもなければ山名方でもない。

彼は、僅かに焼け残つた、土山、関、追分の宿駅を中心に、住み馴れた土地を捨てかねて、山間の村々に味気ない暮らしをつづけている土着の住民たちと親しくなつた。彼等の生活を不逞無頼な軍兵たちの跳梁から救いあげてやろうというのが野武士を志願した動機である。この天才的な浮浪児は、青春の十年間を彼にもつともふさわしい環境の中で自分を鍛えあげた。もとより、野武士稼業であつてみれば、掠奪、強請は朝飯前であるが、新九郎とその一党が目ざすのは戦場であつて生活の場ではない。城を捨てて逃げてゆく落武者のむれを山ふところの、森かげや谷合

いに待ち伏せして、金銀はもとより、鎧、兜から胴丸、腹巻をはじめ、槍、刀、鞍、その他の馬具を奪い、そのまま、さつとひきあげる。東軍だろうと西軍だろうと容赦はない。時には公卿顕官が女房を乗せて逃げてゆく車を襲つて財宝をかすめることがないわけでもなかつたが、しかし、そんなときには必ず礼儀を厚うして、彼等を行くべき方向へ逃がしてやつた。いかに青春の血に渇したればとて、女を山塞にひき立ててくるようなことはしなかつた。

仮りにも、過ぎし日の鎌倉執権、北条の末裔を名乗る伊勢新九郎である。いざ出撃というときには、数十人の配下に戦場から盗みとつた鎧を着せ、下つぱの連中は腹巻、脛当だけで間に合わせた。

新九郎みずからは、小桜縅の鎧に、鍬形の兜の緒をしめ、栗毛の逞しき若駒に梨子地に銀を打つた貝鞍を置かせ、左手に大身の槍を抱え、右手に軍扇をにぎつて乗りだす姿は、野武士、草賊どころではない。一手の大将として恥かしからぬ男振りであつた。

戦乱の最中とはいえ、住民の残る部落では、ささやかながら、秋の祭、春の式典の真似事が行われる。破れ放題に荒れ朽ちた氏神の社ではあつても、神楽があり、濁酒に酔つた村びとが、一夜を楽しく過そうというときには、狩衣姿の新九郎がどこからともなくぬつとあらわれる。

「あゝ、伊勢どのじや、――」

「よう来られました、新九郎さま」

と、親しげに呼びかける声に応じて、鷲づかみにした金一封をうやうやしく神殿にささげる。

伊勢一帯の良民の人気は、かくて新九郎長氏にあつまつた。

三

文明七年七年十日。

山名の一翼として、駿河の府中から五百余騎の軍勢を率いて琵琶湖畔をまもつていた今川義忠が宗全の死後、この戦争に見切りをつけ、大津の砦に守備の兵だけを残して、主力は草津から中山道を桑名に向つて旗鼓堂々と下つていつた。

その隙に乗じた細川麾下の一隊が砦をかこみ、館に火を放つて、今川の手兵は大半討死、――大津は細川方の手に落ちたという通報が街道づたいに鈴鹿山麓の村々に伝わつたのはその日の夕方であつた。

土山宿の裏から峠にぬける間道を、落武者であろう、肩に大きな荷物を背負つた一人の武士がせかせかと歩いてゆく。曲折の多い峡谷は早くも夕靄につつまれていた。

山肌をいろどる緑の色。空にはまだ仄かな明るさが残つている。湧くような蟬の声がぴたりと

やんで、もつれるような日ぐらしの声に変つた。

坂の下の宿まで、山づたいの坂は、背丈ほどにものびた雑草のしげるにまかせている。二里半の道は、左にそびえる断崖が行きつまると、次第に下り坂になり、行手は、たちまち底知れぬ杉の密林に一変する。

あるかなきかのほそい道は渓流にそつて、みるみるうちに密林の中に没し去つてしまうのである。

どつ、どつ、――と大地をえぐるような音を立てて鳴る渓流のひびき。それが遠のくにつれて、ごうつと樹立をゆすぶる山風の音が唸るように聞えてくる。

ざくざくと、河原の砂を踏んで歩いてくる六尺ゆたかな鎧武者は、槍を杖に、前かがみになつて水際へ下つてきた。

若葉のかおりが仄かに流れて、ふさふさとうしろに垂れた髪を浅黄の鉢巻でぐつとしめ、紫裾濃の鎧も左の射向袖だけを残し、馬手袖は、肩の障子板もろとも、ひきちぎつて捨てたらしく、手負いというほどではないが、苦しそうに息をつく姿は一見しただけで乱戦の中をくぐりぬけてきたということがわかる。

眼は底光りを湛えて、らんらんと輝き、顔は半白の無精ひげに掩われて、齢はもう五十を過ぎ

ているらしい、――ひよいと立ちどまると、彼はすぐ首をうしろへねじまげた。
「千種どの、もうひと息のしんぼうだ、鈴鹿を越えれば、関には今川の後陣が屯してござるよ」
荷物だと思つたのは白麻の被布を頭からすつぽりとかぶつた若い女であつた。男の肩にすがりついたまま息をひそめている。女の顔が、はじめて鎧武者の肩の上へうきあがつた。
前にのびた、ほそい指先きが、わなわなとふるえている。齢の頃は十六、七、汗ばんだ頬は上気したようにぼうつとうるんで、ふつくらとした丸顔の、くくり顎の線が、見るからに若々しい。女はきよろきよろとあたりを見廻した。その眼が不安におびえているのは、やつと此処までたどりついたとはいうものの、運命のたよりなさを思えば、身も世もない心の切なさに生きるよすがを失つているからであろう。
「さア、このへんでゆつくりひと休みされたがいい」
足元の雑草の中に、穂をだしたばかりのすすきが風にゆれている。ほつとひと息ついだ鎧武者は及び腰になつて女を河原の砂の上へおろした。曲りくねつた坂道を足にまかせて歩きつづけてきたのである。鎧武者は深呼吸をするように、長く息を吸い込むと、そのまま草むらの上へぐつたりと横になつた。
全身、汗びつしよりになつているが、腹巻をゆるめようともせず両足を前にのばした。草鞋の

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.